〈クレオール〉の多義性

西谷修

■〈クレオール〉の多義性

〈クレオール〉とここで〈　〉を用いたのは、ことさら意味ありげに言葉に呪文をかけるためではない。近ごろあちこちで話題になるこの言葉は、それが指しているものを漠然と了解していれば使用するのには困らないが、いざそれが何を指しているのか厳密に考えるとなると、たちまちカタゴリーの迷路に迷い込むことになる。

クレオール音楽とかクレオール料理という場合には、それがハイチやジャマイカなど、カリブ海の島々に生まれて世界に広がったレゲイやサルサなどの音楽や、その南洋の島々の料理を指すということは、元を知っていさえすれば問題ない。けれども〈クレオール〉はかならずしもこの地域を指す地理的な名称であるわけではない。たとえばフランスで〈クレオール〉と言えば、ふつうはグアドループやマルティニク出身の人びとを指すし、またカリブ海には関係のないインド洋のレユニオン島出身者をも含んでいる。では人種概念かといえばそうでもない。言語学では〈クレオール〉の語を、後にみるような生成条件のもとで生じたある言語の類型について用いる。ただ、ときにそれが言語であることを明示するために「クレオール語」と呼ばれるとしても、「クレオール語」は日本語や英語、フランス語といった民族や国家に結びついた言語システムとは違ったステイタスをもっている。この言語は人種や地理にではなく、そのような言語が形成される歴史的・社会的条件に結びついているのだ。だからフランス語系のクレオールもあれば、英語系、スペイン語系、オランダ語系のクレオールもあり、その地理的な広がりも、カリブ海だけでなく、インド洋にも、中国沿海部にも、ハワイにも、アメリカ合衆国にも及んでいるということになる。

もちろん、〈クレオール〉の語られる領域が違えば、そこに要求される語義の厳密さも違う。けれども何にしろそこに共通しているのは、言語や文化を異にする二種類以上の人びとが出遭い、相互影響や干渉のなかから、もとのものとは違う新しいタイプの言語や文化が、混成のプロセスのなかから生まれてくる、そうした現象の産物であるということだ。そのような現象は人類の歴史のなかでけっして珍しいことではないし、小さな規模でいえば、身の回りでも日常的に起こっていると言えるかもしれない。けれどもそのもっとも大掛かりなものは、ヨーロッパの世界進出と各地の植民地化という、しばしば暴力的な「出遭い」によって引き起こされた。とりわけ奴隷貿易によってまったく作り変えられたカリブ海世界は、そのような〈クレオール〉の生まれるもっとも典型的な舞台だったということになる。だから〈クレオール〉の

呼称はとりわけカリブ海に結びついている。

とはいえこのような理解は、ニュートラルなようで実は〈クレオール〉の重大な点をごまかすとは言わないにしても、切り捨ててしまっている。〈クレオール〉が多義的で見かけに反してたいへん扱いにくいのは、それがわれわれの慣れ親しんだいわゆる人種や言語や文化に関する既存のカテゴリーを混乱させるからだ。それに「異なった文化の出遭い」から生まれるのは予定調和的な「総合」ではない。事実〈クレオール〉は、安定したひとつの文化の類型ではなく、人種や言語や地理といった、ふつう文化の安定性を支えるものとみなされている諸要素の結びつきを、解体し編みなおしながら生まれ、またそれ自身つねに変動してゆくような何かなのである。だから〈クレオール〉は、既存の言語や文化に関する知のカテゴリーとその配置をかいくぐる多義性を帯びるのだが、それは〈クレオール〉が明確に把握されていないからではなく、まさにこの多義性として生まれたのが〈クレオール〉だからだ。

言語や社会に関する知は、往々にして対象のシステムとしての安定性にこだわり、システム生成の歴史性を関心の外におくが、〈クレオール〉の起源にははっきりした一回的な出来事の刻印がある。多義的な〈クレオール〉は、もともとそれを一義的に規定しようとする知になじまず、むしろそういう知の振る舞いの方を明るみに出すようなものなのだ。その多義性を保存するために、ここでは一義化されない概念として〈クレオール〉を強調したいと思う。

■言語学における〈クレオール〉の定義

ところで、言語学は〈クレオール〉にかなりはっきりした定義を与えている。言語学では〈クレオール(créole)〉は、〈ピジン(pidgin)〉と呼ばれるタイプの言語とセットで規定されている。簡単に言えば、ある条件下でピジンが発生し、それが発達したものだクレオールと呼ばれることになっている。この分野では古典になっているロレト・トッド『ピジン・クレオール語入門』(大修館)から両者の定義を引用してみよう。

> ピジンとは、共通語をもたない人びとの間に起こる、ある限られたコミュニケーションの必要を満たすために生まれる周辺的な言語である。(p.5)

たとえば互いに違う言語を用いる人びとが出会って交易が始まると、そこでの意志疎通の必要に応じて、どちらの使用言語にも属さない間に合わせの言語ができる。これが〈ピジン(語)〉だが、この言語は特定の用途を満たせば足りるので、語彙も表現も限られており、生活のすべてがこれで間に合うわけではない。だがこの交易の場に来る人びとは、この簡単な言葉を習得すればとりあえずの用は足りることになる。そして当然ながらピジンの使用者は、日々の生活のためには、それぞれに生まれたときから身につけた母語をもっている。だからピジンは社会活動の一部における補助的な言語だということになる。[1]

ところが何かの事情で、生まれたときから身につける言語としてピジン以外にないという状況に置かれると、このピジンは新しい世代にとっての母語とならざるをえない。そのとき形成される

のが〈クレオール（語）〉である。

クレオールは、ピジンがある言語社会の母語となるとき、生まれるのである。ピジンの特徴であった単純化された言語構造はクレオールに受けつがれるけれども、クレオールは母語であるから、人間の経験のあらゆる分野を表現できなければならない。したがって、その語彙は拡大され、より精巧な統語体系が発達することが多い。(p.8)

つまりピジンは、十全な母語ないし第一言語をもつ人びとが、他の言語圏の人びとと意志疎通するために用いる、有効範囲を限定された補助言語であり、そのような補助言語が第一言語として成長したのがクレオールだということになる。ただ、第一言語つまり母語として成長するためには、それを文字どおり自分たちの成長によって担う新しい世代がいなければならない。つまりこの言語で生きる新世代が、ピジンを母語化するのだ。クレオールと呼ばれる言語の形成には、そのような言語外的要素が必須の条件として要請されている。

母語だということは間に合わせではすまず、ピジンは子供を生んだ（育てる）両親にとっては補助言語にとどまるとしても、それを母語として成長する子供にとっては、生活の全領域をカヴァーし、体験のすべてを表現しうる言語でなければならない。子供が生きるのはこの言語を通してだからだ。そして不思議なことに――この「不思議さ」がクレオール言語の研究に、言語生成や人間の言語能力に関するさまざまな関心を引き寄せている[2]――、ピジンを母語として育つ子供たちは、成長するにつれ、経験範囲が拡張するにつれ、親たちが使うカタコトの言語を、それだけで生活できる十全な言語へと増殖させてゆく。こうしてできる言語は、もはやピジンではないまとまった一言語、ひとがそれだけで生活できるひとつの言語になる。そうなるとその次の世代はすでにれっきとした母語をもって育つことになる。こうしてできた言語、つまり母語化したピジンが〈クレオール〉と呼ばれる。そしてこの変容のプロセスを言語学では〈クレオール化〉と呼んでいる。

〈クレオール化〉が起こる「第一のケース」として、トッドは奴隷貿易が行われていた頃のカリブ海諸島を例にあげている。そのとき、「同じ地域からきた奴隷たちは、何か謀反を企てるといけないので、その危険性を少なくするためにわざと引き離された。そのため、かれらが共通にもっていた唯一のことばは、アフリカの海岸、船の上、またはプランテーションで働きながら覚えたヨーロッパの言語となったことが多い。このような状況に生まれた子供たちは、必然的にこのピジンを第一言語として習得したので、クレオールが生まれたのである。」(p.8)　これが「第一のケース」だということは「第二のケース」もあるわけだが、それはつぎのような場合として説明されている。小さな地域に多くの言語集団が住んでいる場合などでは、ピジンが言語社会の共通語として便利になり重きをなすようになると、やがてそれは公共生活から家庭にまで入ってきて、子供たちはそれをいつしか母語として身につけるようになる。その場合もピジンの〈クレオール化〉が起こる、と。

言語学の定義をまずとりあげたのはほかでもない、意識的にはこの学問がもっとも早くから〈クレオール〉に注目し、さまざま

な角度からクレオール語の研究を重ねてきたからだ。そのため言語学の用法が〈クレオール〉の名に結びつくさまざまな現象の理解の仕方、受け取り方の最初の枠組みになっている。といっても、言語学でもこのテーマが本格的に扱われるようになるのは、一部の先駆的研究をのぞけばごく最近のこと、六〇年代の後半あたりからだといってよいだろう。他のさまざまな分野で〈クレオール〉が人びとの注目を集めるようになるのは、もっと後になってからのことである。そのため、言語学での用法がその後の〈クレオール〉の理解に少なからぬ影響を与え、ある場合にはそれが混乱を招くことにもなっている。

言語学は〈クレオール〉を、地域や人種や歴史に規定されない一定の条件下で生まれる、ある特質をもつ言語の一タイプとして規定する（混乱を避けるために以下ではこれをクレオール語と呼ぼう）。だからクレオール化（クレオール語の生成）は、歴史上いつでも、世界のどの地域にも、一定の社会的条件さえあれば生じうる言語現象だということになる。そういう扱い方は、言語学が「言語」を普遍的にとり扱う学問として成立している以上当然のことではある。けれどもクレオール語ではなく、〈クレオール〉という呼称はいつでもどこにでもあったわけではない。それにはっきりと限定された発生の場所と時代がある。そのことを考えると、具体的な歴史性を捨象した言語学における〈クレオール〉と〈クレオール化〉の用法は、かなり痩せた、そして脱色された用法だということになる。

■〈クレオール〉という語の由来

〈クレオール(créole)〉という語はフランス語だが、多少の語形変化をともないつつ、西ヨーロッパ諸語にはそれぞれこれにあたる語がある。その起源がポルトガル語だということもはっきりしている。それがすぐにスペイン語に導入され、やがてヨーロッパ各国語に広まっていった。だがその伝搬の過程で語義が少しずつずれてゆき、それが〈クレオール〉の多義性に曖昧さ増幅することになっている。

たとえば『スタンダード仏和辞典』を引いてみると、「民族」として「（特に西インド諸島の）植民地生まれの白人」とあり、「言語」として「クレオル語（植民地で原住民の用いる、ヨーロッパ諸国語と土着語との混成語）」とある。『白水社仏和大辞典』でも、記述は多少詳しくなるが、基本的には変わらない。ところが『ランダムハウス英和大辞典』で「クリオール(créole)」を引いてみると、①に「西インド諸島スペイン語圏の中南米現地で生まれたヨーロッパ人」、②に「（特に米ルイジアナ州で生まれた）フランス系移民の子孫」、③に「（原住民、混血児と区別して）その土地で生まれた外国人」等々・・・とある。このうち③は①の一般化とみなしうるから、この点ではフランス語辞典の示す語義と重なるが、②はアメリカ英語に特有の語義である。ただ、これは元フランス領だったルイジナアのフランス系移民を、優勢なイギリス系移民と区別するために使われる用法で、そこには「植民地生まれのフランス人」という「クレオール」の意味は保たれている。したがって、英仏語に共通しているのは、この語が言語以外では、とくに西インド諸島つまりカリブ海の島々の植民地で生まれた白人つまりヨーロッパ人を指すということだ。

ところが、この語が最初に生まれたポルトガル語では事情が違ったらしい。ポルトガル語では"crioulo"がこれにあたるが、こ

の語は「家で養われる下僕」といったほどの意味で「ブラジルの混血黒人」を指すのに用いられたという。それが"criollo"としてスペイン語に導入されたときには、すでに「植民地生まれのスペイン人」を指す言葉になっていた。

ここで、"crioulo - criollo"系統の語が各国語に伝播することで語義をずらしてゆくその経過を厳密にたどることはできないが、少なくとも言えることは、この語が、南米大陸のブラジルに混血黒人が登場したり、いわゆる西インド諸島の植民地に白人が生まれたりするという状況と結びついて生じてきたということだ。それはコロンブスがアメリカを「発見」し、やがて南北アメリカがヨーロッパ諸国の植民地となって、サトウキビや綿花の大規模なプランテーションのために、アフリカから大量の黒人が奴隷として導入されることで作り出された歴史的・地政学的状況である。だとするとこの語がまずポルトガル語のうちに現れたということも理解できる。ポルトガルはアンリケ航海王以来、ヨーロッパ諸国の先鞭をつけて大西洋に乗り出した、海外進出の「先進国」だった。最初にアフリカの西岸を南下したのもポルトガル人だし、ブラジルで最初にサトウキビ栽培を成功させたのもポルトガル人だった。この冒険のなかでポルトガル人が経験したことを、すぐにスペイン人が、そして数十年遅れてフランス人やイギリス人が経験することになる。その経験のなかからこの語が生まれ、やがてそれが同じ経験をすることになった他の国々の言語にも導入されたということだ。

もうひとつ指摘しておきたいのは、この語がもともと言語を指していたのか、あるいは人を指していたのかということである。フランス語の初期の用例としては、一七世紀中葉に「西アフリカ沿岸で使われるポルトガル方言」として使われた例があり、またスペイン語経由では「アメリカ（南）生まれのスペイン人」という意味で知られている。いずれにしても、人とその使用言語は往々にして同じ名で呼ばれるが、後に述べるような理由で、この場合はおそらく、はじめは人を指す語として生まれたものと推測される。

それとは別に、〈クレオール〉の語義には二重の交錯がある。ポルトガル語ではそれは「混血黒人」を指す言葉だったが、それがスペイン語に入ったときには逆に「植民地生まれのスペイン人」を指す言葉になっている。フランス語や英語に移るときにもその語義が引き継がれる。つまり「人」としては最初「黒人（または混血）」を指していたものが、やがて「白人」のために使われるようになったということ。もうひとつは、そのようにフランス語や英語で「人」としては「白人」を指すとされているのに、「言語」としては白人の言語つまりヨーロッパ諸語ではなく、非白人のものとされるその地の新しい言語を指すようになったということだ。

たしかに、奇妙な語義の交錯ではある。だがそれは、もともとあった「ほんとうの意味」がどこかで失われたからでも、だれかの誤った用法が継承されてしまったからということでもないだろう。この語はある新しい状況の必要によって作り出され、共通の経験に導かれていくつもの言語を「移住」するなかで、その状況が呈するさまざまな局面に関して用いられていったのであり、そこにはヨーロッパがアフリカやアメリカに進出した時代の、歴史的な経験が直に関わっている。「歴史的」といっても、ある地域なりある民族なりの空間的に限定されたいわば縦割りの歴史では

なく、遠く離れたいくつもの地域の多様なファクターが交錯して形成される、運動としての歴史である。というよりもう一歩踏み込んで言うなら、〈歴史〉がそのようなダイナミックな運動として、言いかえれば〈世界史〉として、地球を覆って展開し始めたまさにその時期の、新しい事情に絡んで生まれきたのがこの〈クレオール〉という呼称なのである。

だからそこに、統一的に理解できる一義的な語義を求めようとしてももむだだろう。むしろこの語の多義性や語義の交錯のなかに、この語を必要とし、それを生みだし継承し、使用した人びとの置かれた状況や、そのなかで生きた人びとの関係の方を読みとらねばならない。

すでに述べたように、この語の端緒はポルトガル語の"crioulo"にある。これはラテン語の「養う」とか「育てる」を意味する動詞"criare"の派生語に由来するという。それが「ブラジルの混血黒人」について用いられていた。「ブラジルの黒人」とは、アフリカ大陸から大西洋を渡って奴隷として送られてきた黒人であり、その混血の子供とは、この地の支配者となった白人（ポルトガル人）入植者が、黒人女性に産ませた子供だということになる。そういう混血児たちは、父親たる白人の家で育てられるのではなく、他家に出され家僕として育てられるのが常だったという。そんなふうにして余所で育てられ、養われる者、それがこの語の起源であるようだ。つまり"crioulo"という語は、南米の植民地で生まれ、家僕として養われたこのような混血児の呼称として作られたと推定される。

繰り返して言えば、この語は一五世紀末以来のヨーロッパ諸国の「新大陸」への進出、そしてそこへのアフリカ人奴隷の導入が作り出した状況のなかから生まれてきた。ポルトガルでできた"crioulo"は、スペイン語の"criollo"となって語義を変え、やがてそのままフランス語に導入されて"creole"となり、ついで英語にも入ってゆく。この語の発祥と伝搬の順序はそのまま、「大航海時代」以降のヨーロッパ諸国の海外進出と、そこで「発見」された「新大陸」の領有の順序を反映している。まずポルトガル、ついでスペインがアフリカ西岸やアメリカ大陸に進出し、各地に植民地や出先機関を作り、それをフランスやイギリスが追いかけるという、まさにその順序でこの語は生まれ、取り入れられ、伝播していった。「新大陸」に大ぜいの混血黒人が生まれるとか、熱帯生まれの白人が登場するとかいうことは、ヨーロッパ諸国が海外に進出することによってみずから作り出し、そして初めて遭遇した未知の事態だったのだ。そういう事態にまずポルトガル人が遭遇し、やがてスペインや後発のフランス、イギリスも同じような状況に直面するようになる。〈クレオール〉とは要するに、そこに生じた未知の事態が必要とした、名のないものを名指す言葉だったのだ。

■新世界の「副産物」

〈クレオール〉の語義が、ポルトガル語からスペイン語に移るときに、混血黒人から白人（スペイン人）へと反転した理由は定かではない。ただその間の事情を示唆していると思われるのは、植民地における「性関係」である。

忘れてはならないのは、初期の植民移住者はほとんど男たちだったということだ。初めてアメリカに渡ったのは、冒険家や船乗りたちで、海賊まがいの荒くれ者も多かったと言われている。

かれらが「獲得した」土地にやがて他の入植者がやってくるが、たいていは本国に何らかのかたちでいられなくなったり見切りをつけたりした男たちだった。一家で入植するというケースがあるとすればそれは植民地経営がある程度安定してからだろう。だから植民地で子供が生まれるとすれば、はじめは当然ながらは基本的に混血児だっただろう。生むのはたいてい白人支配者の「性的使役」に供された黒人の女奴隷だ。そうして生まれた混血児たちは、実質的な父親がヨーロッパ人である以上半分はヨーロッパ人なのだが、当時はアフリカの黒人がキリスト教徒たりうるかどうか（つまり人間かどうか）が論議されていた時代である[3]。黒人奴隷の産んだ子はヨーロッパ人とは認めがたい。とはいっても白人の産ませた子であることには違いない。

ヨーロッパ人とは認められず、かといって「ニグロ」でもないこの混血児には、分類のための呼び名も法的な地位も与えられていなかった。というのは、このような混血児の発生やその結果は、「新世界」への進出という「歴史的事業」のプログラムには入っていなかったからである。いわばそれは、予期せぬとは言わないまでも、公式の勘定に入らない「副産物」だった。けれどもまったくの「ニグロ」でもなければ白人でもないこの「未規定」の存在、ステイタスのない存在は、まさしく「規定されないもの」としてそのままに名付けられることになる。それがつまりは〈クレオール〉なのである。

ついでに指摘しておけば、「ニグロ」と呼ばれる存在も、この時期のヨーロッパの「発明品」である。スペイン語の"negro"（黒）に由来するこの言葉はもちろん黒人を指す言葉だが、アフリカに住む黒人についてはこの語は使われない。それはアフリカの大地から引き離され、奴隷船の積み荷となって大西洋を渡り、アメリカに陸揚げされた黒人奴隷たちのことを言う。フランス語では"negre"、英語では"Negro"となり、とくに合衆国では蔑称になるが、カリブ海ではかならずしもそうではなかった。当初は黒人奴隷のことを指したのだが、後にはクレオール世界に取り込まれて、黒人の子孫が自分たちのことを「ネーグ」と呼び、やがてそれは価値としてはニュートラルな、ほとんど「人」というのと同じ意味合いで使われるようになった。だからクレオール語では「ネーグ」は蔑称でもなんでもない。

また一方で、奴隷との性関係は宗教道徳上の問題をも引き起こした。それに生まれてくる混血児は、ヨーロッパ人の親族関係や社会関係の秩序に、混乱をもち込む要因にもなる。そうした問題を避けるため、黒人奴隷との性交渉は表向き禁止され、その埋め合わせにわざわざ「ヨーロッパ女性」が送り込まれるようになると、本国を遠く離れた植民地でも「れっきとした白人」の子供が生まれるようになる。その事情を典型的に示しているのは、一七世紀半ばのフランス領カリブのケースである。植民地の性的な「無法」状況を憂えた現地の総督は、文字どおり「女日照り」を訴える書簡を本国に送っている。その要請に応えて、時の宰相コルベール（ルイ十三世時代）は「黒人法」を制定し、黒人奴隷との性関係を禁止するとともに、ディエップやラ・ロッシェルの港町から売春婦たちをアメリカの島々に送り込んだ。それ以後しだいに「植民地生まれの白人」が増えるようになるが、この地でまずへクレオール〉と呼ばれたのは、そういう植民地生まれの白人だった。

そうなるとたしかに語義はずれるが、ずれても同じ言葉が使え

るということの方に、〈クレオール〉という語の含みもつ特質があると言える。この語が「植民地生まれの白人」を指す場合には、その役割はかれらを「本国生まれ」の入植者と区別することだ。熱帯の植民地に生まれたヨーロッパ人は、ヨーロッパ人でありながらヨーロッパを知らない。かれらが帰属するのはヨーロッパ（あるいはスペイン人ならスペイン、フランス人ならフランス）なのだが、そのヨーロッパははるか大洋の彼方にある。その後実際によくあったように、たとえば入植者の子供たちが成長して教育を受けるために「本国（メトロポール）」に赴くとする。かれらは旅立つことで「祖国に還る」のだが、その「帰還の旅」はかれらにとっては、「生まれ故郷」を発って「見知らぬ国」に行く旅でもある。そして往々にして彼らは、たどり着いた「祖国」つまりは「自分の国」で、実際には「よそ者」でしかない自分を見いだすことになる。馴染んだ「故郷」は「流遠の地」で、「祖国」にあっては「異邦人」、それがかれらの生来の性（サガ）となる。

■新しい人間のカテゴリー

いわばかれらはアイデンティティの「脱臼」を抱えている。もちろんヨーロッパには、植民地造営の経験はギリシア・ローマの昔からあったが、それはいわゆる地中海世界の内部での経験だった。ところが一五世紀末に始まる新しい冒険は、ヨーロッパとアフリカ、アメリカの三大陸にわたる「異世界」と「異人種」との出会いと移動を含んでいたという意味で、ヨーロッパ人にとって未曾有の体験だった。そして「新世界」での大規模な植民事業は、副次的にこのような「脱臼」を抱える存在を出現させることになった。熱帯に白人（ヨーロッパ人）は自生しないのに、この「歴史的事業」によって「熱帯生まれの白人」という「亜人種」が登場するようになったのである。かれらは自分の帰属すべき文化の土壌であるヨーロッパの土地を知らずに生まれた。かれらにおいて血（人種）と文化の連続性は、根づくべき場所との関係を失っている。かれらは大洋の彼方に「移植」された者として、生まれながらに実存的アイデンティティの「脱臼」を抱えているのだ。

先走って言うならば、このような存在の登場こそが、「生まれ」に結びついた〈アイデンティティ〉という観念を呼び覚ます。〈アイデンティティ〉とは、それが自明なときには問題にならず、それが欠けていると感じられるときにはじめて問われるものである。ヨーロッパの地に生まれてヨーロッパで育ち、ヨーロッパの言語を話し、そこの文化に浴して生きる人間は、自分がヨーロッパ人であるということをことさらに問う必要がない。だが血筋や受け継ぐ文化からしてヨーロッパ人であるにもかかわらず、生まれの土地においてふつうのヨーロッパ人と違うこの人びとは、自分がヨーロッパ人であるということの意味や根拠を問わないわけにはいかない。つまり何が人をヨーロッパ人（スペイン人、フランス人等々）とするのかが問われ、肌の色とか、信仰とかの、はじめから明らかな要件の他に、人種と言語と出生の地という、集合的アイデンティティの三位一体の観念が生まれてくるのは、こういう問いからなのだと思われる。

それはさておき、ともかく三大陸をまたにかけた「新世界」建設というこの「歴史的事業」は、それまでヨーロッパの知らなかった新しいタイプの人間を大量に生み出すことになった。〈クレオール〉という語が「白人」に使用されるにせよ「混血黒人」に使用されるにせよ、いずれの場合にもこの語の使用を必然化し

ているのは、遠隔の植民地経営という事態がもたらしたこの種の「新しい人間のカテゴリー」の出現である。

ここで注意しておきたいのは、「新しい人間のカテゴリー」の登場というこの出来事は一代だけでは生じないということだ。言語学的に言われる〈クレオール〉の場合でも明らかなように、〈クレオール化〉つまり「クレオールになる」というプロセスは、世代的継起を必須の要件として含んでいる。言語の場合には、ピジンが新たな世代に母語として担われることでクレオール化する。つまり人間の「繁殖」ないし再生産という事態を通して言語が拡張的に変成するわけだが、人について言われる〈クレオール〉の場合にも、生身の人間のレベルでの「繁殖」が欠かせない。それが白人に関して言われるにせよ黒人に関して言われるにせよ、〈クレオール〉は植民地における「二世」以降の世代として出現する。ヨーロッパから白人がアメリカに移民しただけでは、そこにアフリカ人奴隷が輸送されただけでは、〈クレオール〉は生まれない。〈クレオール〉の発生、あるいは生成は、人間が子を産み育てる（あるいは捨てる場合もあるかもしれない）という、世代継承の作業が必要なのだ。少なくともそこには必ず、「性交と繁殖」という、そういってよければ人間の「生き物」としての営みが絡んでいる。

〈クレオール〉はしたがって、「征服」とか「植民地支配」として一般的に語られる歴史的（政治経済的、社会的）行為の次元で発生するのではなく、むしろ「歴史的事業」のうちからは排除され、歴史の闇に忘れ去られる次元、その出来事を担って生きる人びとの具体的な実存のレベルで、そこに胚胎された別の生命とともに〈クレオール〉は生起する。それは、目的という観点からみれば「事業」そのものと直接は関係がない。言いかえればヨーロッパの「新世界」造営は、こうした「新しい人間のカテゴリー」の創出を目指していたわけではない。その目的は金や銀で得られる富の獲得であったり、新たな領土への野心であったり、あるいはキリスト教世界の拡大という宗教的使命の遂行であったりした。その意味ではこの「未知のカテゴリー」は、なければそれにしたことはない、求めずして生じてしまった「副産物」である。それも不可避の「副産物」だ（薬物投与にともなう「副作用」とか、「産業廃棄物」と同じようなステイタスだと考えてよいだろう）。というのは、「歴史的事業」がいかに一般的ないわば「顔のない」行為として語られようとも、その一般性の被覆のもとで事業を担うのは、つねに具体的な人間たちであり、かれらは汗も流せば血も流し、涙も流せば性欲ももつ、生身の人間たちなのだ。そういう具体的な生存者たちが、一般性の背後で「事業」の質を変えてしまう。おそらく世界の「変成」のプロセスは、このような具体的な生存のレベルで生じる「副産物」に多くを負っているのだろう。〈クレオール〉という語はまさにそのプロセスに対応すべく作り出された。そしてその語が指示しているのは、世代継起とか、もっと直接的に言えば「繁殖」という、生き物の生存活動にじかに結びついた、この「変成」の宿る次元なのである。

そこで思い出されるのは、ポルトガル語の"criollo"のもとになった動詞"criar"（養う、育てる）は、「創造する、作りだす」を意味するラテン語"criare"に由来しているということだ。この語源の遠い響きを〈クレオール〉という新造語のうちに聞き取るなら、異世界との「遭遇」によって生まれたこの「新しい人間のカテゴリー」は、帰属するところがないがゆえに「養い子」として

必然的に従属的立場に置かれる者であると同時に、その「遭遇」による「変成」を通してまさに新らしく「創造された者」でもあるということだ。そこにはやがて開化するだろう「創造の秘蹟」がすでに予告されているようにも思われる。

■フランス語の〈クレオール〉

フランス語に〈クレオール〉という言葉が登録されるのは一六七〇年頃とされている。一六世紀にはすでにこの語をもっていたポルトガル、スペインと較べるとだいぶ遅れているが、それはフランスの「新大陸」進出が遅かったということの反映である。ポルトガルとスペインはアメリカ（主として南米）の領有権をめぐって大西洋を観念的な分割線で線引きをした結果[4]、ポルトガルはブラジルの領有権を得て、それ以東はスペインが優先権をもつことになった。そのスペインは大アンティル諸島を征服したあと、メキシコに銀鉱を発見し、大陸部の征服と経営、およびその利権の防衛に主力を注いでいた。そのため原住民のカリブ族の抵抗が強かった小アンティル諸島は、一〇〇年余りヨーロッパ諸国による制圧を免れていたが、そこに後発のフランスが進出することになる。フランスはスペインと敵対する立場を利用してカリブ族に取り入り、グワドループ、マルティニク両島に上陸して、一六三五年にこれを領有した。そしてそこで間もなくサトウキビ栽培に成功し、四半世紀後にはフランス語は、スペイン語を追って〈クレオール〉という語を必要とする現実に当面することになったのである。

フランス語では、この語はまず「植民地生まれの純粋白人」を指す言葉として用いられた。それは、しばらく前からスペイン語からの翻訳文献に"criollo"が「植民地生まれの純粋スペイン白人」を意味する語として登場していたことの影響だと思われる。だが、カリブ海の他の植民地ではもっと多義的に、黒人、白人、混血人を含めて「植民地生まれ」のすべてに対して使われていたようである。

この語はやがて、サトウキビ畑の労働力としてアフリカから導入された黒人奴隷に子供ができると、その子供たちに対しても用いられる。それはカリブ海の島生まれの黒人を、アフリカからの「輸入奴隷」と区別する必要があるからだ。アフリカで「捕獲」され（あるいは現地の首長によって売られ）、奴隷船で連れてこられた黒人は、自分の言語や文化をもち、なじんだ風土があり、なにより「自由」だった経験をもっている。そのすべてを木を伐採するように断ちきられて、別の大陸に運ばれてきたのだが、植民地に生まれた黒人は、生まれながらの奴隷で、「自由」の境遇を知らない。かれらには森もなければ草原もなく、プランテーションの畑と粗末な奴隷小屋、鞭打たれる生活がすべてなのだ。とりわけ最初の世代は、文化どころか母語とする言語さえない（言語の形成については後に述べよう）。そんなプランテーションに育った奴隷と、アフリカから輸送されてきた黒人とでは、もちろん素質も違うし、適した「用途」も違う。それになにより奴隷市場での値の付け方も違うだろう。アメリカ生まれの奴隷は、植民地の環境が人為的だという意味では、あらかじめ根を絶たれた「人工」の産物つまり「新種」なのである。

かれらの境遇は、そこに暴力的な強制力が働いているという点において、あるいは「歴史的事業」にあらゆる能動性を奪われて無理矢理引き込まれたという点において、「喪失」の度合いは「白

人クレオール」の比ではない。だがそれでも、エスニックな土壌から切り離され、無縁の地に「移植」された「株」から生まれたという点では、白人クレオールと共通している。要するにアメリカと名付けられた「新大陸」の発見と、その地の植民地支配という歴史的事業が、ここにほとんど「移民」たちだけの人工的なまったく新しい世界を作り出したのである。カリブ海地域では、ヨーロッパ人の到来とともにたいていの島で原住民は半世紀も経たないうちにほとんど死に絶えてしまった。それはたんに虐殺や酷使のためばかりでなく、ヨーロッパ人がもちこんだ疫病のためとも言われているが、ともかくこうして、「発見」された土地は住民のいない土地となり、以後ここに住むのはすべてがよその大陸からの移住者なのである。この原住民の絶滅が自然のプロセスによって起こったものではない以上、ここには以後「人工の世界」が作り出されることになる。ヨーロッパ人はヨーロッパという「旧世界」に対して、「発見」されたアメリカを「新世界」と呼んだが、それが「新世界」と呼ばれるにふさわしいのは、新しくヨーロッパ的人間の経験領域に加わった場所だからというより、まさにここにかつて存在しなかった一世界が人為的移植によって設営され、それが支配と軋轢と混交のなかで成長してゆくからである。〈クレオール〉はほかでもないこの「新世界」につけられた呼び名となる。

こうして結局〈クレオール〉は、総じてこの熱帯の植民地の「現地産」を意味することになり、まず人間がそう呼ばれ、ついでその他の産物が、食べ物や音楽を含めてそう呼ばれるようになり、やがてはこの世界そのものが〈クレオール〉の名で呼ばれるようになる。もちろんこの「新世界」の生活の必要から生まれた言語もそう呼ばれる。ただ、言語に関して、一七世紀末に「セネガルで使われる劣化したポルトガル語」として「クレオール語」が紹介されており、フランスでカリブ海植民地のプランテーションの言語が〈クレオール〉と呼ばれるようになるのは一八世紀に入ってからのようである。

最初の植民地だったカリブ海に発生したこの言葉は、やがて同じような現象をみた他の植民地にも広がり、フランスで言えばこの他に、アフリカ東岸インド洋上にモーリシャス島、レユニオン島といった（マダガスカルも仏領だったが）地域についても〈クレオール〉が語られる。とはいえそれでも〈クレオール〉がカリブ海の島々に特権的に結びついていることに変わりはない。

（1）ビジンの発生については、ことはそれほど単純ではない。とりあえず林論文参照。
（2）この「不思議」さは実はクレオールの問題系の核心にある。
（3）一五五〇～五一年にラス・カサスと、アリストテレス学者のセプルベダの間で戦わされた「バリャドリード論戦」はその例。
（4）一四九四年のトリデシーリャス条約。

追記：なお、本稿はＮＨＫ出版より近刊予定の『クレオールの教え（仮題）』第一章にあたる部分である。